

鬼房俳句と戦争について

平成二十八年三月十九日

於 塩竈市ふれあいエスブ塩竈

本シンポジウムは、第九回佐藤鬼房顕彰全国俳句大会において実施された。

パネラー 関 悦史、矢本大雪、関根かな
資料参加 宇井十間 (小熊座5月号掲載)
司 会 栗林 浩

鬼房の戦歴

司会・栗林 浩

ご存知の通り、今までは神野紗希さんが名司会をつとめておられたのですが、先程、ムツオ先生からご紹介ありましたとおり、おめでたいことがあって来られないということをごさいますして、私がピンチヒッターをつとめさせていただきますと思います。

まずイントロダクション的に、鬼房先生が戦場へどのようなおもむいたかという地図を、先生の年譜からひきまして作ってみます。素人の作りなもので大変見にくいので

が、お配りしました中に日本がちよっと黒く塗ってある地図がございます。これを二、三分でご説明したいと思います。お手元にごさいますでしょうか。パネラーが、三句ずつ選んだ句の裏側にプリントされております。

それでは、まずですね、鬼房先生が徴兵でもって戦地へいかれた昭和十四年にですね、内地での勤務が少しあつて、昭和十五年一月、朝鮮半島の北の方にちいさな丸をつけてあります。これは咸鏡北道鏡城という所です、北朝鮮の東北部ですね。もうほとんどロシアとの国境。あとで分かったのですが、この地区は北朝鮮がロケットを飛ばしたりする基地



になつているんです。まあ色々な所に基地があります、ここだけじゃありませんけどもね。ここにしばらくいます、それから中国の南京、左下の方へ行っています。南京からさらに漢口、今の武漢ですか、点々で書いて

パネリストが選んだ鬼房の戦争俳句三句

関 悦史 選

梅雨の地に据らぬ足やこは日本『名もなき日夜』
夏草や尿ればたぎる銃後見ゆ 『何處へ』
戦こばみ続けて眼窩だけ残る 『愛痛きまで』

矢本大雪 選

夕焼に遺書のつたなく死にけり 『名もなき日夜』
濛濛と数万の蝶見つつ斃る 『名もなき日夜』
静まらぬ一魂魄や地に枯葉 『何處へ』

宇井十間 選

船霊の在りしあたり水かげろふ 『霜の聲』
冬蔵す季の重みや父の国 『瀬頭』
鬼やんま沼を突きぬけ帰り来ず 『枯峠』

関根かな 選

戦病の夜をこぼろぎの影太し 『名もなき日夜』
吾のみの弔旗を胸に畑を打つ 『名もなき日夜』
残る虫暗闇を食ひちぎりある 『瀬頭』

栗林 浩 選

戦あるかと幼な言葉の息白し 『夜の崖』
銀漢や足の指もて死んだ彼 『何處へ』
終戦の日を南溟に生きてぬし 『幻夢』

参考 戦争俳句と思われるものが多い句集

- (各二十句ほど)
①『名もなき日夜』 ②『夜の崖』 ③『海溝』
④『地楡』 ⑤『何處へ』

あるのは長江でしてね、やはり長江沿いの町が拓けている。とりあえず南京からその漢口へ行きました。さらに宜昌市のある西の方へ行きました。それからまた命令があつて南京に戻つた。この南京に戻つた時に鈴木六林男さんとあの有名な対面があるんですね。鬼房さんの歴史に残っている大切な一日一夜だったという風に思います。

それから日本軍はですね、南へ転出します。まず鬼房先生も台湾の高雄という所へ行きまして。さらに日本軍はとにかく石油が禁輸になりましたものだから、石油を求めて南へと行くことで、インドネシアのバンドンへ行きました。そこでしばらくいたのですが、少し位が上になりましたね。日本から新兵さんを連れて来るといふ引率の役があつて、日本へ出張しています。その時にこの塩竈にも一か月くらいおられたんじゃないかなと思いますけどもね、年譜にそう書かれています。そして戻りの船が出るのが関西の方ですので、大阪にも一か月くらいいたと。そして新兵さんを連れて、バンドンに戻る。それで、戦況が非常にひどくなりまして、とうとう負けて、スンバワという島、バンドンから東の方ですね。この島で捕虜になる。ここに昭和二十一年五

月まで、ご病氣だったものですからね、そう重労働ではなかったようですよけれども、暮らしたということです。このスンバワ島というのは、みなさんはご存知ないかもしれませんが、こう言えば分かんと思います。バリ島。バリ島から飛行機で四十分くらいですかね、小さな飛行機で飛びますと、ロンボク島、スンバワ島、わりに有名な島が並んでいます。このスンバワ島は非常に風光明媚です。平和な今は日本人も行つて、海水浴ですとかサーフィンとかね、ホテルもあるそうですけど、そういう所になつていようです。もちろん、鬼房先生がいた頃はそうじゃないですね。このスンバワ島の横にロンボク島とありますけれど、実は今、中東から日本へ来る油はですね、このロンボク島の所を通つて日本へ、北へのぼつて行くのです。もちろんジャワ島の北のマラッカ海峡を通つて来るのが多いんですけれども、船が多いものですかね、ロンボク島をまわつてくる。それで、ロンボク島からずーっと日本へ近づいて来る途中に金子兜太さんのいたトラック島というのがあると、こういう状況です。これが鬼房さんの戦跡でございます。

それで、鬼房先生に戦争の句があるかどうか

か、狭義の意味での戦争です。色々調べてみたのですが、やはり第一句集から第四句集までが非常に多いですね。『名もなき日夜』『夜の崖』『海溝』『地楡』。この四句集まではそれぞれ二十句とか三十句に近い数があるので

すが、それからずーっと減りまして二・三句ずつが続いて、突然第八句集『何処へ』のところで急に増えてますね。それからまた減っています。でもときどき思い出しながら、戦争を詠んでいるということでございます。これがイントロにもならないごくごく簡単な紹介であります。

早速、パネラーの先生方に三句ずつあげていただいておりますので、それを説明していただきますながら、鬼房先生の俳句と戦争について語ってもらおうと思います。

まずこちらから。関悦史先生です。関さんの事はご紹介するまでもないのですけれども、実作と俳句評論で大活躍でございます、特に有名なのは、平成二十三年ですか、第一句集『六十億本の回転する曲がつた棒』という非常に長い題のついた句集を出されまして、これが大変評価されて、田中裕明賞ももらっております。そのほか色々な所で俳句を出され、俳論を書かれているという、現在非

常に活躍されている悦史さんでございます。では、悦史さんお願いします。

鬼房は戦争を詠んだか

関悦史

鬼房と戦争というテーマをいただいたて全句集を読んでみたんですけれども、栗林さんがおっしゃるように第一句集に多いわけですね。全句集でいうと二十五ページから三十ページのあたりにだいたい集中しています。で、そこらへんの句を見ていくと、鬼房の句で戦争だから特にどうだという変化は、そんなに顕著にない感じがしました。特別興奮してもいないし特別絶望してもいないし、これまでどおり戦争が終わった後も同じように、非常に手堅いというか、ある強固なリアリズムの枠内で詠まれているものが多い。その中で、とりあえず三句あげるといっているのであげたのは、
〈梅雨の地に据らぬ足やこは日本〉
それから
〈夏草や尿ればたぎる銃後見ゆ〉
戦こばみ続けて眼窩だけ残る。なるべくほかの人と被らないようにということも考えて三句選んだのでこうなったのですが、最初の〈梅雨の地に据らぬ足やこは日本〉というこれは、戦争が終わって、捕虜生活も終わって日

本に帰って大地を踏みしめた時の句です。日本に帰ったけども全然足が定まらないガクガクする感じの身体感覚が非常によくはつきり出ている句です。その次は
〈夏草や尿ればたぎる銃後見ゆ〉
これは第八句集になってから、後から思い出してまとめて戦争の句をつくって取り入れたのかもしれないんですが、その中にある句で、外で放尿している時のふとした意識の空白の中に銃後という当時の戦争の位置関係が見えてきてしまう。最後は第十三句集でそうとう離れているのですが
〈戦こばみ続けて眼窩だけ残る〉
これは眼窩だけ残るといっているのは頭蓋骨なんでしょうけれども、戦争が終わってもずーっと南方にそっちで戦死、戦病死された日本兵の頭蓋骨が残っている、それを思い浮かべながらの句なんだと思います。象徴的なことをイメージだけでやろうとすると大体うまくいかなくなってしまうんですが、それはちゃんと出来ている。頭蓋骨だけになった眼窩に鬼房が一体化しているような不思議な感覚がありまして、やはりこういう地に足のついたというか、自分の体の中を通ったものでないと、自分で納得できないという形のリアリズム、それを言葉を組織してなんとかうまく出していくというのが、

鬼房の基本的なやり方なんだと思います。第一句集で出てくる戦争の句って、順番に見て本当にルポルタージュ的というかドキュメンタリー的というか、最初は「兵となり哀れ寒月の海を行く」という、船に乗せられて兵隊になってしまったという所から始まって、ストーリーを追ってるわけではないんですけども、行く先々の景色とか、わりと普通に詠んでいるんですね。その中に「嘔吐する兵なりハンカチを海に落とす」これは船酔いしたんです。吐いていて兵隊がハンカチを海に落してしまったという、おかしいようなすごい悲しいような非常に具体性が強い句があったりして、こういうのも面白いのですが鬼房の場合作家像全体としてみるとこういう手堅いというか体に根ざしたようなリアリズムのほかに幻想的なイメージだけで派手に大向こうを狙えるような大柄な句がいくつもある。これはずっと後に「長距離寝台列車のスパークを浴び白長須鯨」とか、あとは「やませ来るいたちのやうにしなやかに」とかそういう大柄な句がいろいろあるんですけども、この辺はリアリズムがちがちではやっていないですよ。そういうやりかたを戦場詠で直にやっているのは矢本さんがあげている「濠洲

と数万の蝶見つつ斃る」という句で戦場詠の中ではこの一句だけがとびぬけてイメージだけで象徴化の方向に飛んでいて非常に丈の高い張り詰めた句になっている。これが鬼房の戦争詠でとるとしたら代表的になるのではないかと思います。宇井十間さんが本日は今日ここに来られる予定だったのですが、何かの事情で帰国できなくなっちゃったそうじゃあ書きみたいなのもがいたのですが、宇井さんのねらいとは違っているかもしれないのですが同調するところがあり、鬼房にとつて戦争というのは六林男にとつての戦争と同じようにその作家性にそんなに本質的に重要なものではないんじゃないかと。むしろ全句集をでたらめにひいて戦争というにはまったく関係ない句を拾ってみても、その中ににじみ通っているような戦争的なもの、そういう激しさが全体に染み通っていて、そういう題材化されたものとして鬼房の中に染み込んだものとしての戦争的なものというような捉え方をしないと戦争の句だけ表面的に拾ってもどうにもならないんじゃないか。私、宇井さんとあまり話が合うことはないんですけども、この点はちよつと共感できました。

栗林

ありがとうございます。宇井さんのコメントについてはお手元にコピーがおありかと思いますが、これももし時間があればかいつまんでまた要約してディスプレイオンしてみたいと思っております。

それでは一応ぐつとまわってからまたご発言に対する質問などを取上げてみたいと思います。次は関根かなさんにお話ししたいと思います。関根かなさんはいつもこの会のパネルでご活躍でいらして、しかも小熊座の重鎮でございます。最近どんな句を出されたのかなと思つて小熊座をめぐれば良かったのですけれども、ちょうど大震災を詠んだ句が「週刊俳句」に出っていましたので、インターネットからひいてきました。「真つ黒と真つ赤と三月十一日」これは震災の句なんですけれども、その他に非常にシュールな句もありましたね。「囀りの音を遠くに心中す」。心中すなどと言う重たい言葉をお使いになる。あるいは「亡き子らにけふ逢ひに行く雪兎」非常に叙情のある句だと思います。お話は叙情と関係するかどうか分かりませんが、関根さんお願いします。

関根かな

今回の鬼房俳句と戦争についてというシンポジウムのテーマをいただいた時、鬼房俳句と戦争を考えると同時に、私自身も戦争について再考すべきだと思います。昨年が戦後七十年ということもあり戦争についていろいろな議論があった年でもありましたし、連日の報道などでも様々な戦後七十年が語られていたと思います。現在も残念な事に世界のどこかで人と人が戦っている痛ましい事実もあります。鬼房と戦争という事を考える時に非常に難渋したのが、戦争俳人ではないという認識で私はいだったので、確かに『名もなき日夜』『夜の崖』『海溝』『地楡』あたりは非常に戦争の俳句が多いのですが、先程から関さんあたりのお話からも出ているように、非常に実景描写というか淡々とした事実の描写が多くて、取り立てて強く戦争を否定することもなく、強く肯定もしないようなあたりを垣間見ていたので、あまり鬼房と戦争、確かに出征もしていますし、戦地体験もあるのですが、戦争俳句ももちろんございます。しかしながらあまり私にとつては佐藤鬼房≡戦争というふうに直結しづらかった中でこのテーマを頂戴して、非常に考え直す部分もありまし

た。先ほど栗林さんから、どのような戦地を転々転戦としていたのか鬼房の軌跡のご説明もありましたが、やはりどうしても鈴木六林男との邂逅などがドラマティックに語り継がれていて、二人の交友などについてのみが常に浮きぼりにされているとも思ったのですが、戦地でも俳句雑誌を手放さずに読んでいた、表現がどうか分からないのですが、戦争という時代の事実にもまるっきり身を投じていなかった。自分をその場に、戦争一色に染めなかつた。やはり俳句をいつも胸に心に抱いて戦地で過していたというような事が想像されます。鬼房自身が戦争について語っていることというのは、なかなか探すのが難しかったですけれども、やはり戦地に赴いてますので、学校の同窓会ではないのですが、ジャワ海松江大会とかいったその何十年間後と同じ戦地を共にした人々が集う会のご連絡とかお葉書とかが来てたようなのですが、そういった会には一度も出たことがなく、今後もし出ないだろうが、松江で行われるという戦後三十年の時に松江でジャワ会が行われるという時には、松江という土地に惹かれるものがあったって行ってみたいなという思いにかられたこともあったようです。戦場については鬼房

自身が非常に印象深く語っている所だと思っておりますけれども「戦場ではまったく無能な兵隊でしかない私であったが、何故か戦中も戦後も痛みだけは体中に走りまわる」と語っています。鬼房は戦争について話した中で一番この「痛みだけが体中走りまわる戦中も戦後も」という記述がことに心に残りました。この文章は昭和五十一年以降に書かれた文章です。この時点でも今だ戦後であり、戦後は鬼房の体中に痛みとして覆い続けたということになるのかと思います。ところが痛みという部分について、あまり俳句には顕出してこないというあたりも一つの特徴かと思いましたが、私が選んだ一句目と二句目はいずれも第一句集『名もなき日夜』におさめられています。『名もなき日夜』初版序文は有名なのですけれども西東三鬼が、初版の跋は鈴木六林男が書いています。西東三鬼による序文には「北の男」と題されて『名もなき日夜』所収の俳句について戦前、戦中、戦後の俳句を西東三鬼なりに取り上げています。戦中の鬼房が創作した俳句については十二句取り上げておりまして、序文引用として解説をされています。また鈴木六林男による跋には、この『名もなき日夜』という戦場を描写した俳句が多

い句集について「いま『名もなき日夜』を通じて云えることは、彼は彼の過去を基盤として、すべてを愛に帰結せしめていると云うことである。幼少時の逆境と、生死を晒してきた戦場生活の果てに身上として得たものは愛であった。」という跋を残しています。鈴木

六林男による跋には、愛という言葉が用いられています。ここでいう愛はなかなか、簡便に理解できる愛ではないと思うのですけれども、先に鬼房自身が述べた戦後も痛みが覆い続けたこの痛みと同じベクトルを持つのではないかなと感じています。ここで私が『名もなき日夜』から選んだ二句、まずは「戦病の夜をこほろぎの影太し」戦場という異様な光景の中で病を題材にとりながらも極少の小さな一匹の虫の影の太さを見た気付きに満ちた俳句だと思いました。小さき虫にもまた戦争という只中にいても太い影を持つ、そこはかない切ないたくましさを感じた一句です。また「吾のみの弔旗を胸に焔を打つ」これは敗戦をむかえたスンバワ島においてつくられた十四句の中の一節です。露わではないんですが、戦争についての無常さを感じる一句であると思います。「吾のみの」と限定している所に人々とあまり共有共感できない戦争観

を鬼房は持っていたのではないかと感じました。下五「焔を打つ」に敗戦を乗り切る気概が込められているかどうかには今だに結論を出すのがちょっと難しかった。以上二句の解説でした。

栗林

ありがとうございました。また戻って色々議論したいと思いますが、とりあえず矢本大雪さんにお願いたいのですが、矢本大雪さんもこのパネルの常連でいらして、青森とか弘前を中心に文化活動を、特に川柳ですとか、もちろん俳句も句集二つお出しになつてらっしゃいます。むしろ川柳の出版物の方が多かったのでしょうかね。俳句は成田千空さんとの繋がりもあるでしょうし、鬼房先生の研究者の一人としても色々お調べでございます。矢本先生どうぞ宜しくお願いします。

矢本大雪

相も変わらず矢本大雪です。私のとった句はですね。一番とりやすいのは第一句集『名もなき日夜』ですね。三句とも一応テーマには沿うのだろうと思っただけです。ただしみなさんもそう感じたかもしれませんけども、それじゃあどうも芸がないと。二句までとってみて、どこかから一句とろうかなと思つて八句

集『何処へ』までいって、一句戦争に関係あるんじゃないかなと思つて「静まらぬ一魂魄や地に枯葉」とかとったわけですね。とってみて、後付けですけども、これは第二次世界大戦の句ではないなと思ひあたつたんです。

それはまた後で時間があれば説明します。始めの二句は、これは鬼房先生が二十一歳の時の句です。ですから実景だと、自分で実際に体験したのだろうと思うのですが、またその体験だとかなんとかという宇井十間さんがみなさんにも渡っているプリントできちんと書いてますので、それに反論ある方はいっばいいるとは思いますが、ただ宇井十間さんの名譽の為に言っておきますと、宇井十間さんになっていきますけども、土じゃなくて土です。ヴィトゲンシュタインからとったんだと思いますけども、本人には聞いていませんけれども、十間に直しておいて下さい。彼がこれなかつた分だけきちんと論理的に鬼房論を書いてますので、それを読んでいただければ非常に参考にはなるかと思ひます。私は承服できないところもありますけども、つまり戦争と今回の三月十一日の震災とを同列に論じようとしているということもありますけれども、私はどちらも特異な体験であつて、そ

の体験がまた、俳人にとってどういう意味があるんだろうということは無視できないと思っているんですよ。この二句は〈夕焼に遺書のつたなく死ににけり〉と〈濛濛と数万の蝶見つつ斃る〉二十一歳という若さの句です。僕なんかは後年でも鬼房先生の叙景句というのはあんまりおもしろいと感じたことはないですけども、ところが叙景に自分の心が動かされて叙情的になつてきた時に、僕にはすごくおもしろく感じられるんですね。その素質がこの二句にも出ていると思います。これも同じ同僚のたぶん若い兵士でしょう。〈夕焼に遺書のつたなく死ににけり〉つたない遺書なんですよ。お母さんごめんなさいとかなんとか書いてあるんでしょう、たぶん。それを残して夕焼に死んでいった。隣は〈濛濛と数万の蝶見つつ斃る〉土埃とか砂塵が舞っているそれが蝶に見えた。もう叙情ですよ。戦争もなにも鬼房にとつては、戦争とか戦争反対とか、それからこの両方を見ていてもそれから『名もなき日夜』を見ていても、戦争なんだけれどビュンビュン弾が飛び交っているような感じはしないんですよ、あんまりね。ですから非常に静かな観察者であつ

て、その語り口がこういう句になつてこう出てくるんだろうと思います。しかも、叙景に情のつた時に鬼房らしくなるというか、僕の好きな鬼房先生になるわけですね。冷静に叙景句を作っている時の鬼房句はあまり僕は面白いとは思いませんけれども、それは認め方がみんなと違うだけであつて、僕はこういう句が好きなものですから、特に〈濛濛と数万の蝶見つつ斃る〉蝶に喩えてみたけれども詩心が働いていますよね。安西冬衛だつたかの詩に〈てふてふが一匹韃靼海峡を渡つて行つた〉があります、この頃鬼房も詩を書いてますから、やっぱり俳句も根底には詩があるんだということだと思えます。三句目については今ちよつと時間がないので、あまり独占してもあれですので、あとで時間があれば述べることにします。

栗林

ありがとうございます。私のパソコンの変換ミスで欠席された宇井十間さんの十間を土間と書いています、大変申し訳ありません。雑誌になる時にはぜひ訂正していただければと思います。

宇井さんが出された三句。〈船霊の在りしあたりの水かげるふ〉〈冬蔵す季の重みや父

の国〉〈鬼やんま沼を突きぬけ帰り来ず〉一見すると戦争俳句ではないなという風に思いますが、しかし、宇井さんの論は皆さんのお手元にもありますとおり、単純に戦争のあることをそっくり俳句に、彼の言葉でリニアと書いてありますね……リニアというのは直線的にという意味でしょうけど、ポツともってきてそれで一句をなして、それでしたりというのはいかなるものか。むしろ戦争体験その他の風土とか貧しい人々とかそういう人に対する思いを戦争も混ぜこぜにして重層的な句として読まない、戦争だけの句と読むと、鬼房先生の作品の良さを間違えうんじやないかというようなことも言っておりますね。色んな意見がおりだという風に思いますが、私はこの宇井さんが選んだ三句は、なるほど色んなことを考えて選ばれたのだなという風に思いました。

それでは最後に私が選んだ句なのですが、第二句集から〈戦あるかと幼な言葉の息白し〉実は皆さんが仰つた通り第一句集からは、リアルな戦争写生句的な、あるいは戦争の悲しみの句はあるのですが、それはそれとして置いて、後ですすね、帰国してから〈戦あるかと幼な言葉の息白し〉戦争がまたあるかも

知れないというおそれですね、そういう世の中が来てはいけないというような思い、その句が私には印象的でした、とらせて頂きました。それから第八句集、これはかなりたった後ですね。日本へ帰ってきて平和になる。でも不思議にこの第八句集の『何処へ』には、二十句くらい戦争を思い出した句があるんです。その中からとつてもリアルで、こんなリアルなのはとらない方がいいかなと思っただけですが、〈銀漢や足の指もて死んだ彼〉兵卒の中にも悩んでですね、心理的にもおかしくなつて自殺する人もいるんですね。現在でも平和部隊が外国に行つても自殺者が平均よりずっと多いでしょう。自衛隊がね。そういう事があるんでしょうね、極限の世界ですから。ピストルのような物は限られた人しか持たされてなかつたんでしょう、普通はね。鉄砲を使って自殺する時には足の親指で引き金を引かなきゃいけないという非常にリアルな、何十年経つてもですね、こんな句を詠んでらっしゃる。それから最後にとつたのは〈終戦の日を南溟に生きてぬし〉まさにスンパワ島は南溟ですけども、遺句集『幻夢』ですね、これもお亡くなりになる間際になつてもですね、自分はああ生きてきちゃつたなという思

いですね。金子兜太さんがトラック島から帰ってきてから、大決心でね、すごい句を作つたりしてその後の生き方を完全に決めてますけども、鬼房さんはそれほど大きな変化はない。ないけれども最後までお亡くなりになる間際まで〈南溟に生きてぬし〉、生きていてどうなつたんだろうかということを自分で考えている。これも戦争の句だつたんだなという気持ちで選らばせてもらいました。

これで一巡しましたので、あとはまた関さんに戻つてご自分が選んだ句の補足とか、欠席裁判で申し訳ないですが宇井さんが選んだ句とか、あるいは他の方々がとつた句、あるいは鬼房先生は戦争俳句よりむしろ風土とか貧しき者の俳句が主体であつて決して、戦争俳人じゃないですね、そんな様なことも含めて何か一言お願いします。

鬼房は戦争俳人か

関

戦争俳人ではないですね。みなさんがおっしゃったこととか宇井さんが書いたこととか、言葉を変えると戦争を一種の日常として詠んでますよね。日常の延長。それまでも色々不遇意識だつたり病弱だつたり苦勞もあつた

んでしようけども、そういう個人の人生にとつての大きな出来事というだけの取り込み方であつて、イデオロギーなんかはそんなに入つてこないし、日常の延長として淡々と詠んでいるからこそ鬼房の俳句として戦争中句もそのまま読めてしまう。戦場に行つた俳人の中で例えば長谷川素逝とかは戦争に当時イデオロギー的に同化していたとか、その中国人の捕虜を、手向かつたために打ち倒す句があつたりする。こういうのは作者より戦争が強くなつている。それから戦場に行つた俳人では富澤赤黄男がいますけども、富澤赤黄男の場合は、戦争に行く前から自分の句をスタイルとか世界の見方が出来ていてその中で〈夏々とゆき夏々と征くばかり〉とか〈木の凄絶の木に月あがるや〉とかそういう自分の世界観の中で昇華されたものとして戦場を詠んでいる。また逆に戦争に行かなくて戦火想望俳句をやつてた人達は、西東三鬼とか三橋敏雄とかいいますけれども、そこら辺はおそらくはニュース映画の映像が元になつているのでしようが、〈機関銃熱き蛇腹ヲ震ハスル〉とか〈バラシウト天地の機銃ヲト黙ル〉とか〈逆襲ノ女兵士ヲ狙ヒ撃テ！〉とか、こういう映像的に処理された格好良くメカニカ

ルで興奮できるもの未来派的な美学に則ったところのあるものとして詠むわけですね。それぞれどういう風にとどの立場から戦争を詠むにしても戦争に接する前にそれぞれの作家のスタンスというか資質というかそういうものがあった、それと戦争という事象とがどういう出会い方をするのかということ、その戦争俳句の質が決まってくるわけですけども、佐藤鬼房の場合は戦争にあつた結果として特別大きな変化は被らなかつたし、またそれに対して特別な思いも、まあひどい目にあつて大勢多分知り合いが亡くなつたのでしようからそれに対する思いはあるんでしょう、戦争が嫌だというのも本当に骨身にしみて感じている句もポツリポツリあるんですが、そんなに特異な特殊な事態としては詠んでいないですね。本当に個人の人生、俺にとつての戦争というその枠内で詠んでいる。後になると戦争反対の句というへ戦あるかと幼な言葉の息白しと栗林さんがあげた句ですが、戦争反対というメッセージを句に入れようとするとうちやうわけですよ。子供らに戦争がある世の中を残してはいけないということ。こういうつくり方今でも、まあ最近ちよつと政治的

にどんどんきな臭くなつていきますからいつばい見かけるのですが、そういう句のひとつのプロトタイプをもう鬼房が作つちやたというか、それも「子供」という言葉ではなくて、へ幼な言葉の」と、そしてへ息白し」ということで肉體性が入りますよね、言葉と肉體性についてこの二つの間の架け橋みたいなところで句をつくるというのが鬼房の基本的なスタンスで、この言葉と肉體性の間というところで鬼房の資質が非常に出てくることが多いと思うんですよ。そういう自分の資質に則つた形で反戦メッセージをうまいこと作つてしまつたので、もう子供を出して戦争に反対する俳句つてこれ一句あればいいんじゃないかというくらいのも出来ではないか思います。それで、戦争反対は後々になつて読んだ句で変なものがありましてね、四百十二頁だから、たぶん第八句集あたりかな、第八句集の『何処へ』ですね。中村草田男にへいくさよあるな麦生に金貨天降るとも」といつて空から金貨が降つてきても戦争あつてほしくないという変な句があるのですが、それに負けず劣らず変な戦争反対の句でへいくさ忌む蠅虎に変へられても」という。ハエトリグモつていわゆる蜘蛛の巣を張らないで獲物のちいさい虫に

飛びかかつてとつ捕まえて食う蜘蛛なんですが、そういう蜘蛛の姿に変えられてもそれでも戦には反対するというそういう句です。こちでもちよつともの喩えがかなり突飛で滑稽があつて俳句としておもしろいものになつてののですが、これは鬼房がおそらく本気で言つてるんだらうなと感じさせるところがある。それはやっぱりへ蠅虎に変えられても」という特殊なイメージですけども、他にも鬼房の身体性、言葉を介した形で初めて出てくる身体性、そのへんのイメージがここに介在するところがあるんです。その二句あとにですね、へ送り火に屈みつくづくいくさ忌む」やっぱり戦は嫌だなあと思つている、送り火だから亡くなつた人の魂を思いながら、しゃがみ込んでそれをつくづく思つているという句ですが、ここでは屈みこんでつくづく物思うという身体としての鬼房というのが出てきます。いずれにしても身体性によつて言葉、思いが具体的なものになつた時に鬼房の句になるという自分の俳句の生理を無意識的にもしれませんが、よく理解してその枠内で作つている。戦争にあつたからといってそれを詠んでも浮ついたものにはならないわけですよ。特別華やぎもしないし、特

別浮つきもしない。だからと言って戦争という題材と、わざわざ出征までしないと俳人として出会いそこねたかというそんなこともない。本当に淡々と自分の生理、自分の俳人としての技量に則ってそれで何とか俳句を詠むことで乗り切ったというのもある。伝説的な鈴木六林男と出会ったシーンでの二人の句なんです、二人ともお互い名前だけ知っていて戦場で初めて会うんですけども、鈴木六林男が怪我人の搬送がなんかに紛れ込んで勝手に歩いてきて脱出し、それで鬼房に無理やり会ってすぐ別れたという経緯だったらしいのですが、それで別れて二人が同じような句を詠むんですね。鈴木六林男の方がへ会ひ別る占領都市の夜の霰で、佐藤鬼房がへ会ひ別れ霧の闇の聲音追ふでですね。会って別れるということ、霧の闇と夜の霰なので材料大部分一緒ですね二人とも。そこで二人が別の表現になるのは鈴木六林男の方はへ占領都市の夜の霰です。占領都市という占領されている都市、戦争全体の大状況が鈴木六林男の場合にはまず頭に入っていて、その大状況の中で、コマのように動かされている自分の立場に対する鬱屈をこめている。必ず大状況が句に入ってくるんです、六林男の場合は。

それに対して佐藤鬼房はどうやっているかというと、唯一食い違っているのはへ聲音追ふこれは占領都市とかなんとかそういう大状況的なところは鬼房はほとんど考えてなくて、会って、別れて六林男がせつかく会えたのに闇の中に霧を被りながら足音がどんどん離れていく。その足音を追う耳という身体性に特化するわけですね。自分の身体からは絶対に離れない、離れないまま闇の彼方を窺うというそういう身体性と言葉の密着度というものが鬼房の場合は常にある。この二句はほとんど同じ句に見えるのですが、そこに二人の俳人としての生理が非常にきつばり分かれてるんじゃないかなと思います。

栗林

六林男さんとの違いなんかもお話しして下さってありがとうございます。関根さんどうですか。今までのを含めてあるいは自分の他にもこういう句を選びたかったとか何でも結構ですか……。

関根

今、関さんが仰った六林男との若干ドラマティックに捉えられがちな邂逅やその俳句について、ちょうど宇井さんのレジュメでしよるか、その一頁目の最後の方ですね最後の

四行目。「例えば私は、鈴木六林男の俳句を語る上で戦争はさほど重要ではないと考えている。六林男にとつて戦争体験とは一つの「杖」のようなもので、それなしでは歩いていけない厄介な過去でしかなかった。私は杖なしで自在に暗躍する六林男の俳句を知っているし、それらを語るために戦争の記憶は必要ない。六林男を戦争体験という観点から読もうとする読者は、彼の俳句のもっとも本質的な部分を見失ってしまう。」以下、若干まだ書いているんですけども、宇井さんらしい見方かと思つてます。レジュメの一頁目の真ん中よりちよつと後に、これ毎回宇井さんが語られることかもしれないのですが、とあるテーマが毎回、毎年あつて絶対鬼房と直結させようとしないうですね。今回も第二段目くらしい最後に「逆にいえば、せいぜい人間的体験としての戦争を問題にするのであれば、あえて鬼房を取り上げる必要がはたしてあるのだろうか」と。宇井さんの所見が書かれている通り、必ずやテーマをやや離脱する様なイメージでいつも鬼房俳句を論じてらっしゃる。今日いらつしやらないんですけども、非常に六林男だったりと戦争と鬼房について冷静でありながらも熱く語るような姿が目には

浮かんできます。

私もう一句『瀬頭』から〈残る虫闇を食ひちぎりゐる〉という、『瀬頭』ですから平成四年に刊行されておりますので、だいたい六十代後半から七十代の句が収められていきます。この〈残る虫〉の解釈は様々、色々あると思うんですけども今回私戦争というテーマで一つ選ばせて頂きました。句集自体が平成四年刊行なので、もはや戦後とはいえぬ時に作られた俳句だと思われるんですけども、平和なる世において暗闇を食いちぎる、しかも残る虫が、この残る虫に私は鬼房が投影されているような、戦前、戦中、戦後淡々と経過した鬼房がこの平成の元号になつて残る虫と自らを表現して戦争をもしかしたら回顧したのではないかと、悔いなのかどうなのか暗闇を食いちぎりいるというような、おどろおどろしい表現ではあるんですけども、私の独断的な見方でこの句を選ばせて頂きました。先ほど鬼房自身が語った戦後も痛みだけは体中を走り回るといふ言葉も残しているの、平成の世になつても鬼房にとつては戦後であることには変わりはないか、痛みは体中を駆け回り続けていたのだと思ひました。いわゆる、戦後、時が経つにつれて成熟してい

く戦争俳句がある中で、先ほどから何回もあまりにも淡々と戦争を描いている鬼房の俳句があるというので、鬼房は独自な視線から戦争を捉えて俳句を作った。もしかすると、自分の俳句、戦争を材にとつた俳句と他の戦争俳句とは同じに位置づけてはほしくないというようなアピールのようなものも感じつつ、今回いろいろな俳句を読ませていただきました。社会性俳句、社会性俳人の代表として戦争ということをしてテーマとして捉えるのは非常に肝要で重要なことだと思つたのですけれども、今ひとつ連結しないちよつともどかしさを感じながらの鑑賞に至つてしまったような部分は、私自身も悔いが残つています。以上。

栗林

はい、ありがとうございます。それでは、矢本さん同じような質問なんです、何かお話しただけですか。

矢本

私は、ここにいるパネラーの中では一番性格がいんじゃないかなと思つたんですけども、というのは主催者側の手の内にまんまとのつかつてしまつて『名もなき日夜』から二句選んだと。それで戦争と鬼房、鬼房俳句と戦争についてというテーマがあつた時に、一

番いいのが第一句集からとればいいやと思ひ込んでしまつた所が、みなさんの句を見てみると、そうとう反骨精神が旺盛だというか第一句集からとつている人はあまり多くないんですね。ただ、普通に読めばやつぱり戦争の真つ只中で作られた俳句という意味では、第一句集の『名もなき日夜』というのが取り沙汰されるだろうなとは思つたんですけども、やつぱりここにいる手練れの方達はみなさん、相当な悪人だとか、私が一番性格がいいわけで、このまま全部第一句集からとるべきところ第三句だけ、〈静まらぬ一魂魄や地に枯葉〉というのをとつてしまつたわけなんです。これが、はじめは第二次世界大戦の延長上にある句だと思つてとつたんですが、よくよく読んでみるとですね、これは私だけの思い違いかもしれませぬけれども、この句を作つたのが六十三歳の時、この前後に旅行をしたりもしてるとは思つたんですけども、鬼房の頭の中にあつたものを考えてみると、実は昔の天和朝廷と蝦夷の戦い。私は蝦夷の末裔なんだというのが、意識がすぐくあつたんだと思つてます。それも戦争ですよねやつぱり。ところが歴史が何百年も経つてから、そういうのもつてきて戦争だと言われても困ると思つ

んですけれども、風土的に岩手で生まれて、塩竈で育つてというか塩竈に来て、暮しているというこの生死の中にはやはり蝦夷の血を意識せざるえないというような所が鬼房の中にはあつたんじゃないかなと思うんです。それが別に第二次世界大戦の時の句と直結はないわけなんですけれども、この三句目だけを見てみますと、やはり大和朝廷と蝦夷との戦いを少しは意識しているんじゃないかなと思ひながら、そうしてみるとへ静まらぬ一魂魄や地に枯葉」というのが長い歴史の中で培われていつて作られた句じゃないかなと思ひ所があるんです。これが、たまたま『何処へ』の中に入っている。他の『何処へ』の句を読むと、やはりまだ第二次世界大戦の句の延長上にあるもんだと思つても不思議じゃないくらい沢山ある訳ですね。ところが、ここに一つ大和朝廷というものを意識して読んでみるとそれにも重ね合う所があると。何でこんなに鬼房は蝦夷であるということを意識して、しかもそれを主張してゐるんだろうと思つて僕もむつ市生まれですので、下北のちょうど横顔のアギトのあたりですね、そこにむつ市というのがありまして僕はそこで生まれたんですけれども、どうもそこで生まれてみると単

に偶然にむつ市で生まれたということしかないんですが、なんだか蝦夷の末裔だと思つてころがあるわけなんです。それほど風土的に貧しくて虐げられたという意識がすぐあるわけなんです。鬼房の中にもそれがたくさんなあると思います。そういう精神的な塊みたいなものを抱えていながら、しかも今度は戦争に行つて、これが戦争でなくてこの間の大震災であつても同じようなものだと思うんですけれども、鬼房の詠み方というのは、戦争反対とか震災を何とかしろとか、復興を急げとかなんとかそういうような主張があつて作られていような句ではないんです。先ほど皆さんが言つた気がするんですけども、僕はやっぱり観察者の目で見ている。というかへ夕焼に遺書のつたなく死ににけりもへ濛濛と数万の蝶見つつ斃るもどちらも自分のまわりで起こつたということ、その観察を非常に冷徹に本当はそのまま映像になつてゐるんですけども、それに叙情を加えて描きだしているという。これが二十一歳の時の句です。『名もなき日夜』の句はこういう情がわつと溢れ出る所があるからもの凄く面白いですよ。嫌な句とか変な句もありまして、僕がなかなかついていけない句もあり

ますけれども、やっぱり心底打たれる句というのは『名もなき日夜』に一番多いと。それをこつこつと素直に詠んでいる観察者の目というものが感じられるという所と、その他にはもう少し難しいことを聞きたければ先ほどの宇井十間さんの文章を読んでいただければいいと思います。僕の説を補完するものじゃなくて宇井十間さんの説がきちんと書かれていると思ひます。彼はこういうテーマを与えられた時にきちんとそれを捉えて、分析して色んな視点から物を見ることが出来る人ですから。

戦争体験の影

栗林

ありがとうございました。

関

矢本さんが性格がいいとご自分で仰るようになりますね、へ夕焼に遺書のつたなく死ににけり」とへ濛濛と数万の蝶見つつ斃る」とこれは私が当然さつき言つたように、戦争、戦場で詠まれた句で鬼房の句を一句あげるとしたらへ濛濛と数万の蝶見つつ斃る」と一句だろうということになると思ひますが、どなたか絶対あげるだろうと思つたから、それを期待

して他の句をあげてしまったということなので性格のいい矢本さんには大変感謝してます。

栗林

すいません。ちょっと私もその件についてだけ、申し上げます。第一句集から私まだ実は沢山とりたいのがあったんですけれど、ですからそんなに性格悪くはありませんので、我々も。

関

関根さんがさつき仰っていたんですけども鬼房と戦争についてどうも迫りにくいところがあるというのは、鬼房って新興俳句の出自っていうことになっているし、内容的にはプロレタリア俳句くさい所もあるし社会性くさい所もあるし風土詠的などころもあるし、人間探求派のなども多少はあるんですけども、どういうところに置いてもうまくおさまらない人なんです。それは鬼房の個性がどうしても強く影響していて、戦争と鬼房について迫りにくいというのは鬼房が戦争という事象について一般的な考察や俳句は全然やらないからです。だから鬼房が戦争に対してどう思っていたかとかどう対応したかかっていうのをひろっていくと鬼房という固有性を掘り下げることにはか繋がらないので鬼房

と戦争というものを関数的に処理することがどうしても出来ないという所があると思えます。それから、色々東北が虐げられていて同調しているんじゃないかという話もありましたけども、第八句集でまた戦争の句がちよつと突然思い出したようにばつと出てくるんですが、第八句集つて一九八三年でそこらへんで戦争の句が出てくるんですが、この時期社会的に何があったのかという点、中曽根康弘内閣というのが出来て、日米の関係は軍事同盟であるといつて日本はソ連に対する防波堤の不沈空母であるとか言っていた時期なんですよ。それで鬼房の体が反応してしまったという可能性もあるんじゃないかと思えます。鬼房という人の実人生に俳句の内容を還元するというのは、なんでもそうですけど文

学者の作品は全部人生でこういうことがあったから、こういう作品になりましたという筋にもつていくのは非常に読み方として貧しいので、そつち方向はあまり掘り下げたくはないんですけども、一応参考としてそういう社会的背景があつたかもしれないということも言っておきます。それから矢本さんが仰った観察者的に詠んでいるということなんです

濛と数万の蝶見つづ繋るもどちらも死者の体験を詠んでいますよね。死んだ人間というのは発言出来ないのだからおそろく鬼房の身近な若い兵士が死んだんだろうと思うんですが、それに対して観察者の面もありつづどちらかという点力及ばずという点、巨大な力に圧倒されて死んでしまった、命を落としてしまった者の代理人として俺が何か言つてやらねばという代理人的な立場があつたような気がします。

栗林

色々議論が出ましたけれども、確かに仰るとおり鬼房先生は戦争俳人ではない、社会性俳人だと言われるけども、それだけではすまない、風土の俳人だと言われるけどもそれだけでもない。叙情俳人だと言われるけどもその面はあるけども、それだけでもない。去年のテーマはユーモアでしたね。鬼房先生にユーモアの俳句があるかと思つて調べて「ない」と思っていたんです。しかし、よく探せばあるんですね。今回も戦争の俳句。ですけど戦争俳人じゃない。それも含めて非常に多面的な句を作つておられた鬼房先生がもし戦争実体験がなかったとしたら、こういう仮定の質問というのはよくないんですけどもね

どうでしょうか。鬼房先生の句は変わったでしょうか。変わらなかったでしょうか。それにお答えにくかったら何でもいいのでお話しただけですでしょうか。どうぞ。

関

基本的には変わらなかったと思います。

栗林

もう少し補足して下さってもいいんですけれども。

関

戦争を日常として詠んだという話をさっきからしてましたけども、戦争を詠んだものに限らず鬼房の句というのは例えば戦場で誰かが死んだり異常事態に立ち会って、こんな大変な事が起こってるんだぞと人に知らせるかそういう趣はあまり感じられないですね。一義的には自分自身に全部向いている。言葉を使うことによって私的などこか高みへぬけていくという文学的な志向もないわけじゃないんですけれども、一義的にはこの現実には納得出来ないそれこそ名前の通り鬼のようなものとしての自分に対し、それを鎮めるための言葉として俳句を詠んでいて、それが結果的に人に伝わるなにかを担うことになるつもり方になっている。基本的には代理人的な独り

言がまずあって、そういう圧力をかけてくるものというものは別に戦争に限らないわけですよ。自分の病氣であつてもいいし、貧乏であつてもいいし、いずれにせよ何かしらそういうものにとりつかれる質の作者ではあつたと思うんですね。ことさら戦争で見事な俳句を作つたという所がそんなになかつたし戦争で反応が変わつたということもなかつたし、本当にただ体質が変わらなかつたというだけなので、戦争にあつていなかつたとしても代表作の一つ二つ欠けることになつたかもしれないんですけど、基本的には変わらなかつたんじゃないかかと。

栗林

はい、分かりました。じゃあ関根さんいかがでしょうか。

関根

私も、今回鬼房俳句と戦争というテーマを頂戴いたしました。今の栗林さんのご質問、戦争を体験していなかつたら句は変わったかどうか。変わったかどうかのどちらかでご返答するとすれば、なんら変わらなかつたと思えます。ちよつと平易な言い方になつてしまふんですけども、やはり鬼房にとつて、戦争体験というものが人生において、重く重要な

大きなものではなかつた、そうであつてほしくなかつたというような意味合いもあると思います。同窓会的な同じ戦地を体験した人が三十年振りに会うとか、そういった会には出席することもないだろうし、出席はしないとしような鬼房自身の言質もございませうし、私としては、戦争というものが鬼房にとつては重いウエイトを占めるものではなかつたのではないかと思ひます。

栗林

はい、ありがとうございます。じゃあ矢本さんお願いします。

矢本

僕も、探したんですけども鬼房自身が戦争体験について書いてたものとかいうのが見つからなかつた訳なんです。ただし、鬼房のこういう俳句を読んでいると僕が感じているのは鬼房の句というのはどの対象も全て自分の肉体を通して言語化されていくというか、こういう体験そのものが全て鬼房の体の中に溜まつていつているというような気がするわけです。ですから、変わったか、変わらなかつたかというところですけども、たぶん鬼房がもっと遅くに生まれていれば、今の東北大震災のことについてこの戦争

詠と同じような事を書かざるをえなかっただろうし、それだけ鬼房は俳句には真剣に向き合ってきたなと思いますから、同じ高さにあるとこのことを言えないんですけれども、震災も戦争も同じだとかということは、僕もめったなことでは言えないんですけれども、こういう経験が鬼房の作品句の世界を太らせて豊かにしていった、豊かにしていったというのも言葉が悪いですね。これが鬼房を作ってきたんだと。常に鬼房は観察者であつたと思ふんですよ。全ての色んな経験それから吟行について行つても、それがうまく浄化されない時とかそういう時にはあまり句として、僕にとつてもおもしろくないんですけれども、情が乗ってきたりとかすると、ぐんと面白くなるんですね鬼房の句は。だから僕は鬼房が叙情作家だろうなと思ふんですけどそれはみなさん反対意見もあると思いますが、戦争の中に行つても叙情作家であつて、こう

悶々と蝶に見えるんですよ土埃とかが、映像になつてしまいますよね。「西部戦線異状なし」というので最後の狙撃兵の前を蝶が一匹舞つていてそれが死んでエンドロールというのがあると書いていたんですけども、そういう蝶の使い方というのはこれ、うまいです

よね。うまいというと、語弊があるんですけども、鬼房には実際にそれが見えていたんだと思います。つまり土埃が蝶に変わつていつてるんです。そこがやっぱり詩人鬼房と僕は言いたいような気がするんです。俳句の根底に詩を持っていたということが言えるんじゃないかなと思つています。

栗林

はい、ありがとうございます。一言でいうと私の見方としては、戦争は鬼房先生にとつてもものすごく大きな経験であつた筈であります。この酷かつたであろう戦争体験がまったく欠落していたら、先生の句は多少は変わつていた、と思いますが、証明できないんです。その証明できない、しなくてもいいんでしようね、たぶん、そういうものは「ユーモア」や「風土」を含めて「叙情」「戦争」などなどを含めて先生が成り立っていたということなのかなと、月並みにあえてまとめればそうなっちゃうんじゃないかなと思います。

不満なまとめかと思いますが。まとめない方がよかつた方が良かつたかもしれないんですけども、時間がきました。ご静聴ありがとうございました。